第４章　確認調査の概要

第１節　概要

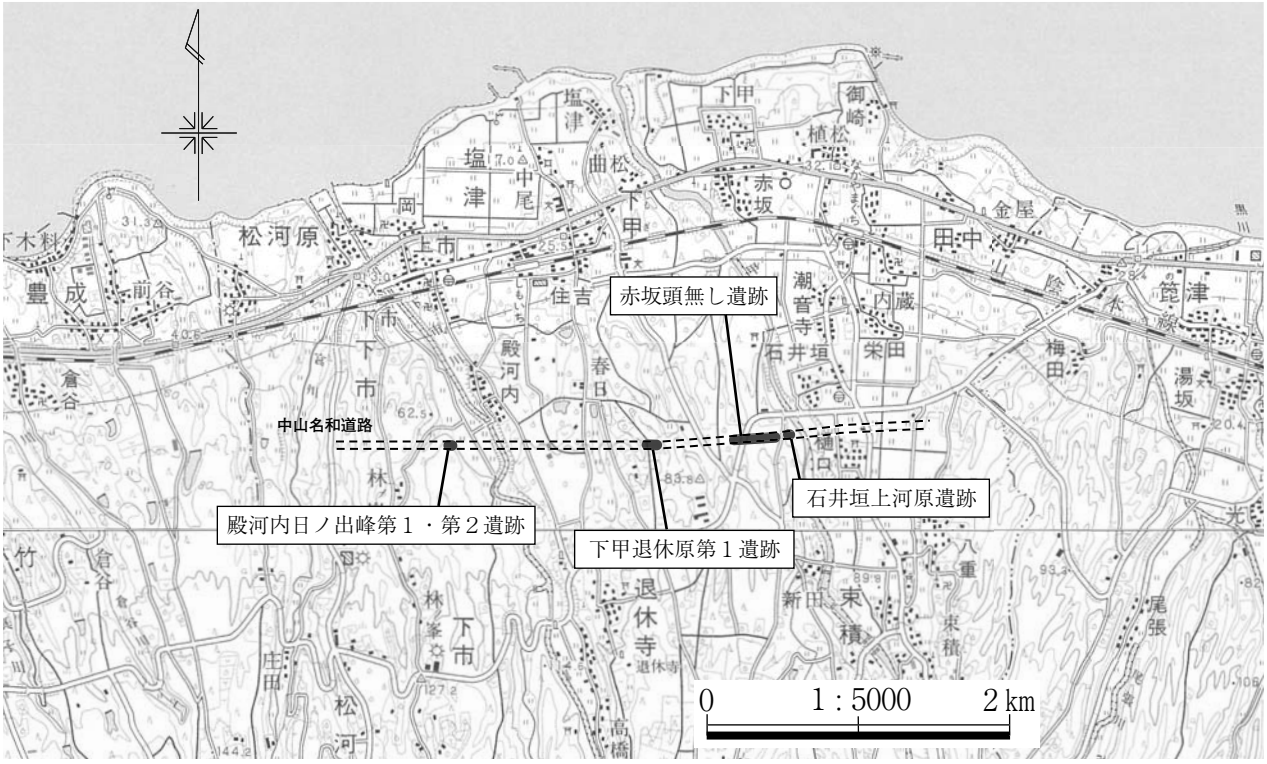
平成22年度は、中山名和道路建設予定地内に所在する５遺跡について確認調査を実施した（第48図・表８）。設定したトレンチの総数は55本、調査延べ面積は833.5㎡である。

調査の結果、殿河内日ノ出峰第１遺跡、赤坂頭無し遺跡、石井垣上河原遺跡の３遺跡において遺構を検出し、遺跡の現存を確認した。一方で殿河内日ノ出峰第２遺跡、下甲退休原第１遺跡では、遺物は若干出土したものの遺構及び遺物包含層を確認できなかったため、道路建設予定地内に遺跡は現存しないと判断するに至った。

本報告では、何らかの遺構を確認できたトレンチについて平面図及び土層断面図を掲載した。遺構が確認できなかったトレンチは、地形や土層堆積状況により必要と判断したものについて縮尺50分の１で柱状図を作成し、土層堆積の概略を示した。なお、断面図及び柱状図に付した網掛けは火山砕屑物堆積層や河床堆積とみなしうる砂礫層等、すなわち地山であることが明白な堆積にのみ付した。

表８　確認調査成果一覧

遺跡名	トレンチ数	調査面積	主な検出遺構	遺物包含層の有無	主な時期
殿河内日ノ出峰第１遺跡	5	35.5㎡	土坑１	なし	－
殿河内日ノ出峰第２遺跡	10	116㎡	－	なし	－
下甲退休原第１遺跡	10	170㎡	－	なし	－
赤坂頭無し遺跡	24	446㎡	竪穴住居跡１、土坑２、ピット４、溝１、製鉄関連遺構１	あり	縄文時代～古墳時代
石井垣上河原遺跡	6	66㎡	石列（墳墓に伴う可能性あり）２、土坑１	あり	縄文時代～古墳時代



第48図　確認調査遺跡位置図

第２節　殿河内日ノ出峰第１・第２遺跡の調査

調査地点　西伯郡大山町殿河内735－4

調査期間　殿河内日ノ出峰第１遺跡：平成22年11月24日～平成22年12月22日
殿河内日ノ出峰第２遺跡：平成22年９月16日～平成22年10月４日

調査面積　殿河内日ノ出峰第１遺跡：35.5㎡
殿河内日ノ出峰第２遺跡：116㎡

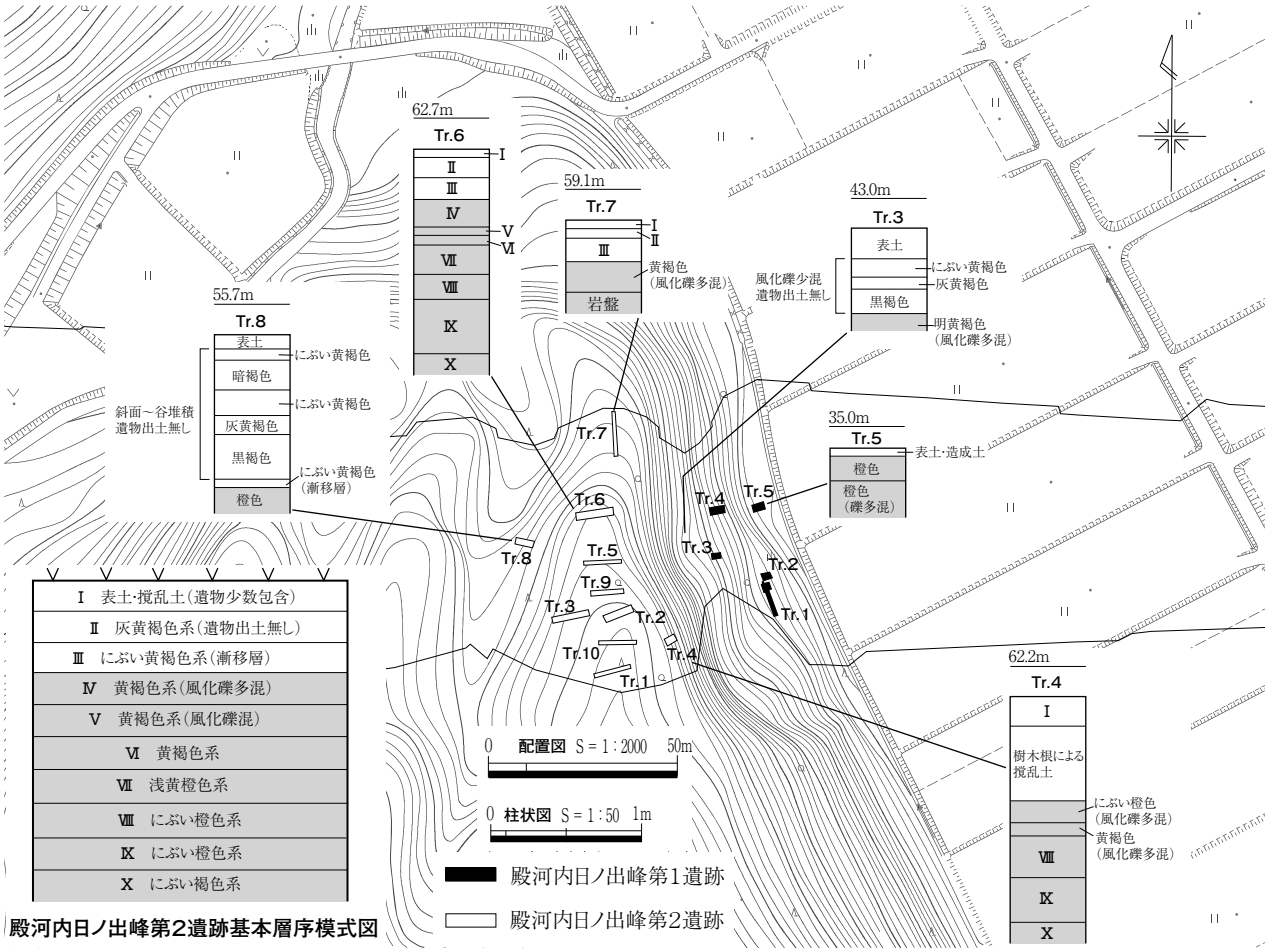
調査概要（第49図）

殿河内日ノ出峰第２遺跡は、大山から北方へ派生する丘陵の狭隘な支尾根上に位置する。標高は概ね55～66mである。その東側は急峻な斜面となり、下市川により形成された狭い沖積地（殿河内上ノ段大ブケ遺跡が所在）へ至る。殿河内日ノ出峰第１遺跡は、その斜面部に該当する。両遺跡の地目は森林で、大半がスギ・ヒノキの植林地となっている。

以下、各遺跡ごとに詳細を述べる。

殿河内日ノ出峰第１遺跡（第49・50図、表９、PL.25・26）

調査地は先述のとおり斜面地であるが、斜面下位は傾斜が緩くなりテラス状地形を呈していたため（以下、テラスと記載）、当該箇所を中心にトレンチを計５本設定し調査を実施した。Tr.１・２・５



第49図　殿河内日ノ出峰第１・第２遺跡 トレンチ位置及び基本層序柱状図

表９　殿河内日ノ出峰第１遺跡トレンチ一覧

トレンチ名称	規模（m）	面積（㎡）	確認した遺構			確認した遺物包含層			その他出土遺物			確認した遺構面数等	遺構検出層位
			遺構名	出土遺物	遺構の時期	層位名	出土遺物	時期	出土層位名	遺物名	時期		
Tr.1	1×7＋2×2.3＋0.3×0.5	11.75	SK１	炭化材１	不明	－	－	－	－	－	－	１面	④層上面
Tr.2	2×2.5	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.3	1.5×2.5	3.75	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.4	2×4	8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.5	2×3.5	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
面積合計		35.5											

をテラス、Tr.３・４を斜面の中位に設定した。斜面上位は急峻で、丘陵上の殿河内日ノ出峰第２遺跡を含めた周辺のトレンチ調査結果を踏まえると、遺構の現存する可能性は低いと判断し、トレンチを設定しなかった。

調査地内の堆積は斜面とテラスで堆積状況が大きく異なるため、基本層序の設定は行っていない。基盤層は風化礫を多く包含する火山性砕屑物堆積及び礫層（御来屋礫層か）からなる。基盤層の上にはテラスでは表土又は撹乱土が堆積し、斜面では表土と土壌化が進行した堆積が確認された。例えば、第49図Tr.３の表土下の堆積で、灰黄褐色、黒褐色を呈する。樹木根等による土壌化や上位からの流出による影響を強く受けた堆積と考えられる。

調査の結果、Tr.１で土坑を１基（SK１）確認したが、遺物の出土は皆無であった。他トレンチの状況を加味すると、SK１以外に遺構が現存する可能性は極めて低いと判断されたため、鳥取県教育委員会事務局文化財課との協議を経て、SK１の完掘を以て殿河内日ノ出峰第１遺跡の調査終了とすることとした。以下、Tr.１及びSK１の詳細について述べる。

その他のトレンチにおける調査結果は表９を参照されたい。

Tr.１（第50図、PL.25）

テラスの平坦面に並行し概ね南北方向に設定した。先述のとおり、トレンチ北端で土坑を１基（SK１）を確認した。SK１の本調査に際し、土坑全体を検出するためトレンチ北側を一部拡張している。

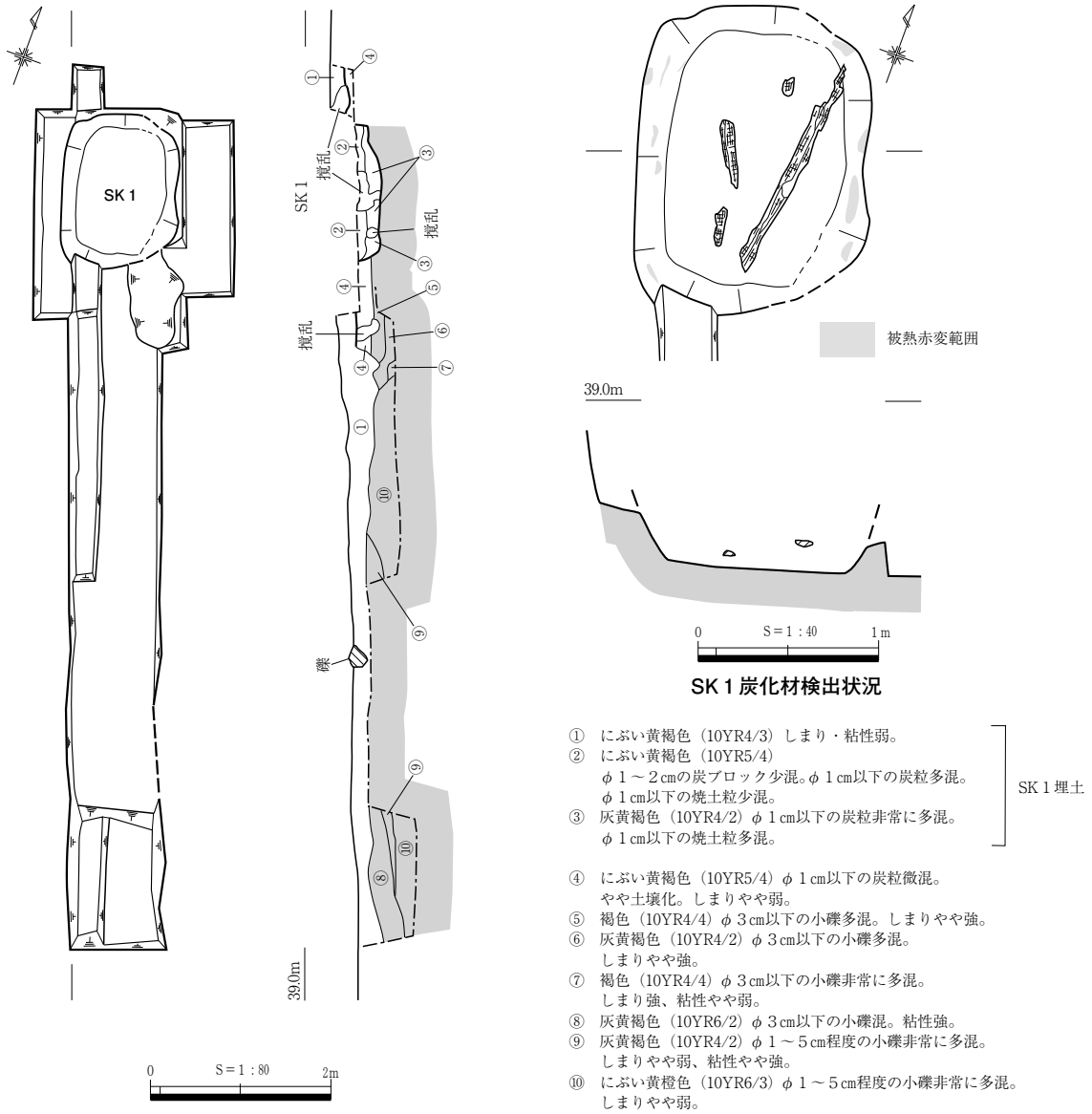
トレンチ南半は、表土（①層）下に基盤層である礫層（⑧～⑩層）が露出する。一方、SK１のあるトレンチ北端では表土下ににぶい黄褐色を呈する堆積（④層）が認められる。④層はSK１掘方により掘り込まれるが、堆積範囲が調査地北側に限定され、遺物の出土が無いため詳細は不明である。④層の下には火山性砕屑物による基盤層⑤層が堆積する。

SK１は、表土下の④層を掘り込む土坑で、平面楕円形状を呈する。検出面での規模は、長軸1.7m、短軸1.30m、深さ0.25cmである。埋土の色調は、にぶい黄褐色、灰黄褐色を呈し炭化物粒を多く包含する。埋土中より、土坑底面からやや浮いた状態であるが炭化材が出土した。加えて、土坑壁面には被熱のため赤変した箇所が認められることから、本土坑は製炭土坑と考えられる。炭化材以外の出土遺物は無く、本遺構の帰属時期は不詳である。ただ、炭化材は炭化が不十分な箇所に木質が遺存していたことから、営まれた時期はさほど遡らないと推察される。

殿河内日ノ出峰第２遺跡（第49・51図、表10～12、PL.24）

トレンチは丘陵上を中心に計10本設定した。丘陵西側の狭小な谷地形へと続く斜面下位に１本（Tr.８）、殿河内日ノ出峰第１遺跡へと急激に落ち込む東側斜面の上位に１本（Tr.４）設定した。

Tr.４・８を除く丘陵上に設定したトレンチでは、表土下に灰黄褐色土（Ⅱ層）が堆積する。Ⅳ層以下は火山性砕屑物による基盤層で、Ⅲ層は基盤層への漸移層と思われる。丘陵先端に近いTr.７では、



第50図　殿河内日ノ出峰第１遺跡Tr.１

Ⅱ層が土壌化、流失したためか表土直下に岩盤が露出する箇所も認められる。

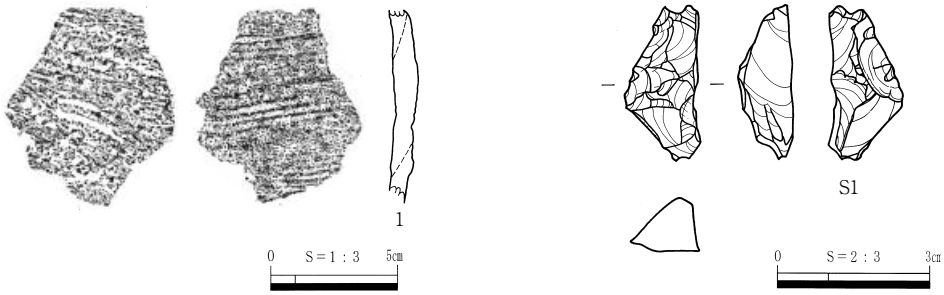
斜面設定のTr.４は斜度が急なためⅡ層が流失した可能性があり、表土及び撹乱土下に基盤層がいきなり露出する。丘陵西側斜面のTr.８では黒褐色系を中心とした谷堆積土及び丘陵側からの流土と推定される堆積を確認したが、いずれからも遺物は出土していない。

調査の結果、比較的密にトレンチを設定したが、遺構及び遺物包含層は確認されず、出土遺物は表土及び撹乱土中からの極少数に留まった。そのため、対象範囲内に遺跡は存在しないと判断した。なお、各トレンチの調査結果については、表10を参照されたい。

調査地内出土遺物を第51図に示した。１は縄文土器深鉢の胴部片である。器面調整は条痕及びケズリ状調整後ナデで、後晩期における粗製土器の可能性がある。Ｓ１は黒曜石製石器で、両極剥離痕のある石器削片である。上面・下面からの剥離痕が認められる。

表10　殿河内日ノ出峰第２遺跡トレンチ一覧

トレンチ名称	規模（m）	面積（㎡）	確認した遺構			確認した遺物包含層			その他出土遺物			確認した遺構面数	遺構検出層位
			遺構名	出土遺物	遺構の時期	層位名	出土遺物	時期	出土層位名	遺物名	時期		
Tr.1	1×10	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.2	2×8	16	－	－	－	－	－	－	表土	不明土器片	不明	－	－
Tr.3	1.5×10	15	－	－	－	－	－	－	表土	縄文土器	縄文時代	－	－
Tr.4	2×3	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.5	1×10	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.6	2×9	18	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.7	1×12	12	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.8	2×5	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.9	1×9	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.10	1×10	10	－	－	－	－	－	－	表土	黒曜石製石器	縄文時代	－	－
面積合計		116											



第51図　殿河内日ノ出峰第２遺跡出土遺物

表11　殿河内日ノ出峰第２遺跡出土土器観察表

掲載番号	取上番号	遺構 地区 層位名	挿図番号	ＰＬ番号	種類 器種	法量（cm）	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	1	Tr.2 表土	51	26	縄文土器 深鉢	器高 7.8△	外面ケズリ状調整。 内面条痕後ナデ。	密	良好	内外面浅黄色	

表12　殿河内日ノ出峰第２遺跡出土石器観察表

遺物番号	取上番号	遺構 地区 層位名	挿図番号	ＰＬ番号	種類 器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
S1	3	Tr.10 表土	51	26	両極剥離痕のある石器 削片	黒曜石	3.1	1.4	1.1	4.0	

第３節　下甲退休原第１遺跡の調査

調査地点　西伯郡大山町下甲1041－653

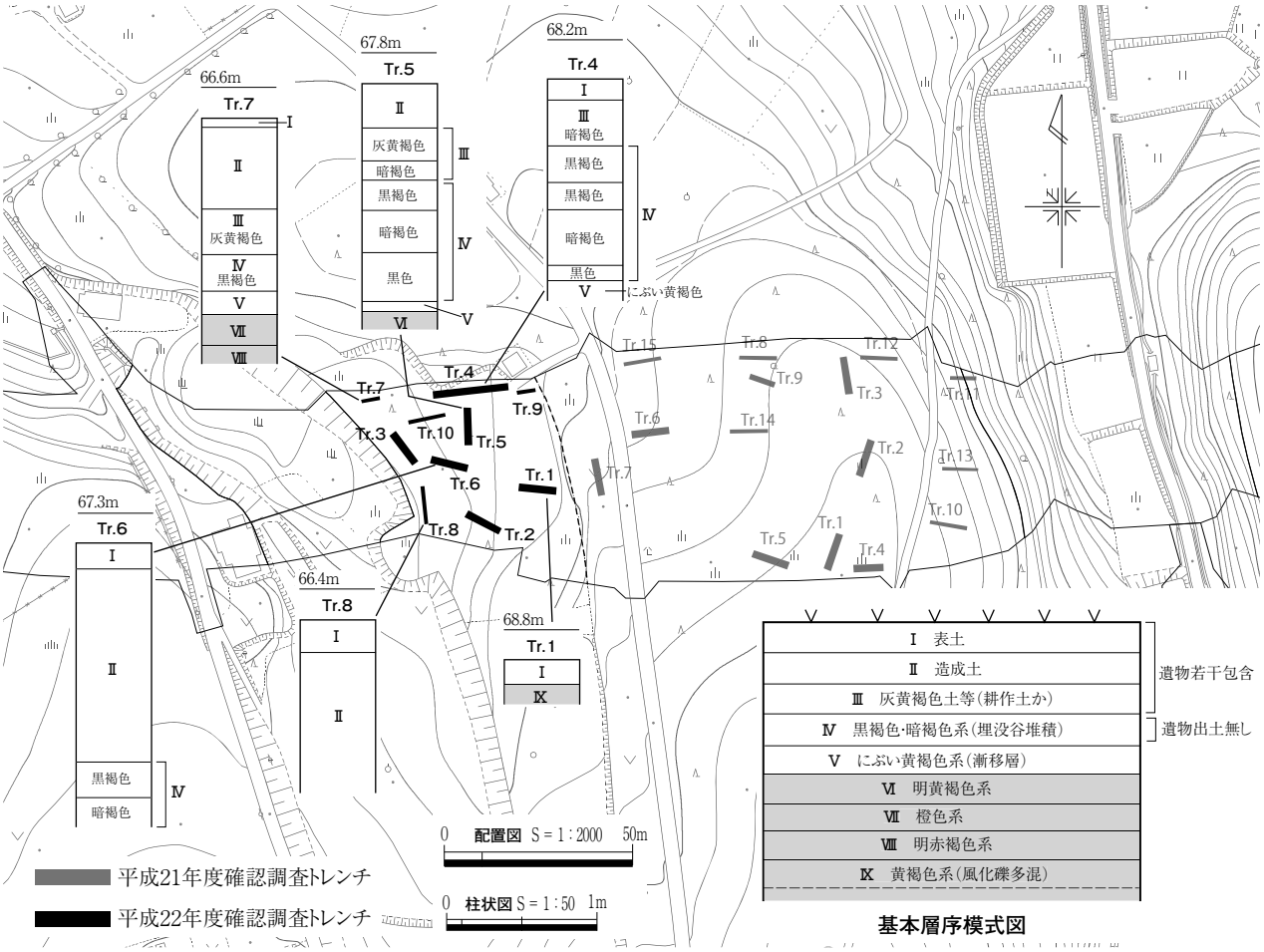
調査期間　平成22年８月23日～平成22年９月14日

調査面積　170㎡

調査概要（第52・53図、表13～15、PL.26・27）

下甲退休原第１遺跡は、大山北麓に派生する丘陵上に位置する。調査対象地の東半分（第52図網伏せ範囲）は、平成21年度に確認調査を実施し、遺物包含層を１層確認したほか、土坑（落とし穴）１基、ピット１基、溝１条を確認している（鳥取県埋蔵文化財センター 2011）。

本報告調査地は平成21年度調査地の西隣で、地目は畑地である。現地表面の標高は約66～68mで、平成22年度調査地との境界（第52図破線部）から本調査地側は畑地開発に伴う大規模な削平を受け、比高差が１～２m生じる。以西の地形は緩やかに下るが西端で再び大きく掘削され、急激に落ちこむ。



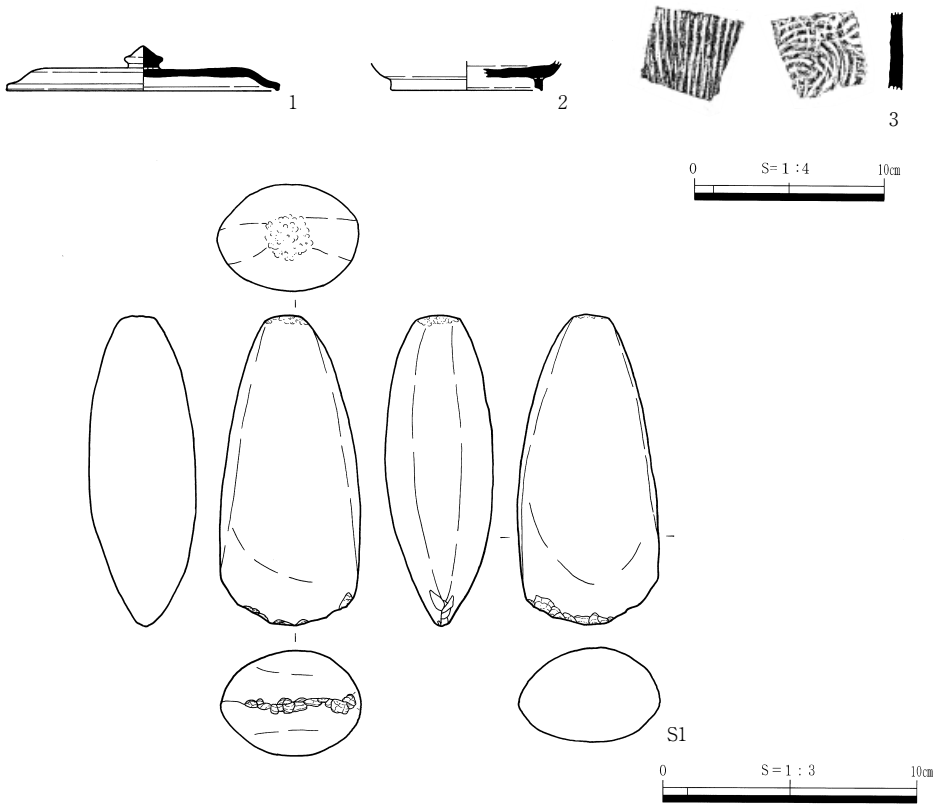
第52図　トレンチ位置及び基本層序柱状図

表13　トレンチ一覧

トレンチ	規模(m)	面積(㎡)	確認した遺構			確認した遺物包含層			その他出土遺物			確認した遺構面数等	遺構検出層位
			遺構名	出土遺物	遺構の時期	層位名	出土遺物	時期	出土層位名	遺物名	時期		
Tr.1	2×10	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.2	2×10	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.3	2×10	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.4	2×20	40	－	－	－	－	－	－	Ⅱ層	弥生土器・須恵器・土師器	弥生時代・古代	－	－
Tr.5	2×10	20	－	－	－	－	－	－	Ⅱ層	須恵器	古代	－	－
									Ⅲ層	弥生土器	弥生時代		
Tr.6	2×10	20	－	－	－	－	－	－	Ⅱ層	弥生土器・須恵器	弥生時代・古代	－	－
Tr.7	1×5	5	－	－	－	－	－	－	Ⅲ層	須恵器	古代	－	－
Tr.8	1×10	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.9	1×5	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tr.10	1×10	10	－	－	－	－	－	－	Ⅱ層	弥生土器・須恵器・土師器	弥生時代・古代	－	－
計		170											

調査地内にトレンチを計10本設定した結果、現況は旧地形の様子をとどめておらず、重機による掘削及び客土による造成が盛んに為されていることが判明した。調査地北東側に設定したTr.４・５・９では、埋没谷の堆積(第52図基本層序Ⅲ・Ⅳ層)が遺存していたが、Tr.１・２は表土下にいきなり火山性砕屑物による基盤層が露出する(Ⅸ層)。また、Tr.６・10以西は削平・造成が特に著しく、Tr.６からTr.８にかけての南西側は、客土が人力掘削の及び難い程厚く堆積していた。

調査の結果、表土、造成土及び旧耕作土(Ⅰ～Ⅲ層)からは弥生時代、古代に帰属する遺物が若干数出土したが、包含層及び遺構は確認されなかった(各トレンチの詳細については表13参照)。既述したように、後世の改変により旧地形が大きく損なわれていることを加味し、何らかの遺構が存在してい



第53図　出土遺物

表14　出土土器観察表

遺物番号	取上番号	遺構 地区 層位名	挿図番号	ＰＬ番号	種類 器種	法量（cm）	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	12	Tr.4 撹乱土	53	26	須恵器 坏蓋	口径 7.0 つまみ径 2.0 器高 2.35	外面宝珠状つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ。内面回転ナデ。	密	良好	内外面灰色	
2	3	Tr.6 造成土	53	26	須恵器 高台付坏	底径 8.0※ 器高 1.5△	外面回転ナデ。高台内回転ヘラケズリ後回転ナデ。内面回転ナデ。	密	良好	内外面灰色	
3	5	Tr.4 表土	53	26	須恵器 甕	器高 4.0△	外面平行タタキ。内面同心円文当て具痕。	密	良好	外面灰オリーブ色 内面灰色	

表15　出土石器観察表

遺物番号	取上番号	遺構 地区 層位名	挿図番号	ＰＬ番号	種類 器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
S1	16	調査地東側 表土	53	26	磨製石斧	安山岩	12.3	5.6	4.2	389	両端に敲打痕跡有

たとしても消滅してしまった可能性が高い。

以上のことから、本調査対象地では遺跡は現存しないものと判断した。

第53図にトレンチ出土遺物を示した。１～３は須恵器である。１は坏蓋で、平坦な天井部に宝珠状つまみが付き、肩部から口縁部は弱く屈曲する扁平な器形を持つ。２は高台付坏の底部資料。体部を欠き、器形は不明である。直立気味に高台が付く。３は甕の胴部片。Ｓ１は安山岩製の磨製石斧である。全般に風化が著しい。両端には敲打痕跡が確認でき、二次的な使用が窺える。

【参考文献】

鳥取県埋蔵文化財センター 2011『樋口西野末遺跡　下市天神ノ峯遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書37